【330】

氏　名(本　籍)	梅　野　圭　史（兵庫県）
学位の種類	博　　士（体育科学）
学位記番号	博　甲　第　1,417　号
学位授与年月日	平成10年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	【課題形成的学習】の理論と展開 －小学校体育科を中心として－
主　査	筑波大学教授　　教育学博士　片　岡　暁　夫
副　査	筑波大学教授　　阿　部　生　雄
副　査	筑波大学教授　　高　橋　健　夫
副　査	筑波大学教授　　佐々木　俊　介

論文の内容の要旨

1．論文の構成

梅野圭史氏提出の「【課題形成的学習】の理論と展開－小学校体育科を中心として」という題目の論文は，序論，第1部　第1章～第3章，第二部　第4章，結論，および，資料からなっている。400字原稿用紙換算1627枚相当のものである。

2．論文の内容

本論文の研究目的は「教師」「教材」「子ども」の三方向の力が釣り合う授業を創りだすための新しい「教師の指導性と子どもの主体性」に関する仮説をつくり，それを実践の場で検証することにある。仮説は，子どもたちが自らの意志で問題を課題化し，自らの手で解決する「課題形成的学習」の実践方法である。

研究方法としてまず一般教育学における「教師の指導性」と「子どもの主体性」についてのこれまでの理論を検討し仮説を導出する。そして第二部では授業実践を観察することで仮説の検証を行なうという方法である。

第1章では教師と子どもの教育的関係について一般教育学における先行研究を検討し，そこから研究課題を導いた。すなわち，1．子供たちの自己活動を保障する場として教師と子どもが共に主体である「主体－主体」関係を確立するにはどうすればよいのか，2．「主体－主体」関係にもとづく授業を客観的な学習成果にまで結実させるにはどうすればよいか，である。

第2章では，一般教育学において認められた「指導性と主体性」の問題が戦後の体育指導論の中でどのように取り上げられ，努力されてきたのかについて，先行研究の検討が行なわれた。その結果，体育科では，一般教育学に比べて，「指導性と主体性」の論究が実際的かつ具体的であり，内容の深い様相にあることを認めている。つまり，「子どもと文化」，「授業と学習」，「主観と客観」などの二律背反から出てくる実践上の問題を子どもの生活から捉え，それらの統一や調整を図ろうとしてきたとされる。そして，個人が感じる楽しさと運動種目の特性に触れる楽しさを子どもに共有化させていくことを体育科の学習指導の中心に据えることが重要であることを示した。

第3章では，「課題形成的学習」が「指導性と主体性」の関係を統一する授業論の仮説になりうるかを検討した。多面的な子どもの生活から学習を出発させ，集中的な運動の技能特性に向かう学習過程をいかに設定するかを課題とした。子どもたち自ら課題を形成し解決も委ねることを保障するために，共有課題を学習のプロセス（課題

をつかむ－課題を深める－技能的特性をたしかめる－技能的特性を身につけさせる）に即して配列する方法が有効であると考えられた。そしてこの場合，教師と子どもの教育的関係を「一体的・共同的関係」として把握せしめる「課題形成的学習」は十分に意味があることを明らかにした。さらにモレンハウアーの教育論を視座にし共有課題の意義を検討し，それが自分に向けて提示された教材の中で課題形成の多様な機会を発見する「問題設定」であると同時に「真理の追究」過程で子ども同士の間で生じる「ハビトスの共有化およびハビトスの修正を促進する機能を有することが明らかにされた。このことが「生きる力」を高めると考えられた。また，「共有課題」は技能特性を知覚情報として子どもに伝える翻訳的思考を生み出しやすくし，教師と子どものハビトスの共有化を促進し，主体－主体関係を成立させやすくすると推論された。このことにより，文化の再生産の授業論としての意義も見いだせるとした。

第4章では，「課題形成的学習」を実際の体育授業において検証することを目的としている。そして5つの研究課題を設定して分析している。すなわち，1．子どもたちの体育授業に対する愛好的態度を測定する態度尺度の開発，2．「課題形成的学習」における子どもたちの愛好的態度を高める要因の検討，3．「課題形成的学習」における教師の授業活動が子どもの態度や技能に及ぼす影響の検討，4．「課題形成的学習」における学習プログラムが子どもの態度や技能に及ぼす影響の検討，5．「課題形成的学習」による授業とその他の課題解決的学習による授業との比較をし，「課題形成的学習」の有効性を検討すること，である。それぞれを検討した結果，「課題形成的学習」による指導と主体性の統一という基本仮説が成立すると結論された。

今後，さらに実践の中で出会う予期せぬ出来事を媒介として，それらの意味を追究するための事例研究を積み重ねることが期待される。

審査の結果の要旨

本論文は，体育の授業研究論としてすぐれた著作である。とくに一般教育学理論と体育科授業論を結合した点において，単なる体育授業研究の水準を抜いている。ともすれば実践と理論の乖離が問題とされるのであるが，「課題形成的学習」の仮説を十分に吟味しそれに理論的厚みと深さを与えながら，実践研究で検証を行なっているところにオリジナリティが認められる。体育学の世界に単なるHOW TOを越え，原理的な立脚点を見いだしたものであり，体育授業の世界への貢献が期待される。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。